

「葵祭」「浅草三社祭」「博多どんたく」春祭りに込められた日本人の心

1 春に行われる葵祭

5 月 15 日は、京都の「葵祭」でした。

「葵祭」は、正式には賀茂御祖神社（下鴨神社）と賀茂別雷神社（上賀茂神社）の例大祭です。毎年 5 月 15 日ですが、本来は旧暦の 4 月酉の日のお祭りで「賀茂祭」とも言われています。

石清水祭、春日祭と共に三勅祭の一つとして、夏の「祇園祭」が庶民のお祭りであるといわれているのに対して、春に行われる「葵祭」は「賀茂氏と朝廷の公式行事」として行われ、その公式行事を貴族や庶民が見物するというような風習だったのです。京都のお祭りの中でも、このように朝廷のお祭りと庶民のお祭りの分かれているというのは、なかなか興味深いところがありますね。

ちなみに、「京都三大祭」といえば「葵祭」「祇園祭」そして「時代祭」ですが、この時代祭は平安神宮の神宮創建を祝って行われたものであり、明治 28 年の平安神宮創建後に行われたものであって、お祭りの歴史はかなり浅いものでしかありません。京都で昔の祭りといえばやはり「葵祭」と「祇園祭」が代表ということになります。

葵祭は賀茂御祖神社と賀茂別雷神社の例祭で、平安中期の貴族の間では、単に「祭り」と言えば葵祭のことをさしていました。欽明天皇の 567 年、国内は風雨がはげしく五穀が実らなかった時がありました。欽明天皇は、当時賀茂の大神の崇敬者であった伊吉の若日子に、転機と五穀豊穡を占わせたところ、この時の天候不順は賀茂の神々の祟りであるという占いの結果が出たのです。さっそく、若日子は欽明天皇からに勅命をおおせつかって、4 月の吉日に祭礼を行い、馬には鈴をかけ、人は猪頭をかぶってかほくらべ 駆競をしたところ、風雨はおさまり、五穀は豊かに実って国民も安泰になったという言い伝えがありました。

この時から、欽明天皇の時代は、毎年旧暦の 4 月の吉日に、賀茂神社に勅使を使わせ、五穀豊穡と国家安泰を祈るようになったのです。

その伝統が毎年続き、819 年（弘仁 10）には、朝廷の律令制度として、最も重要な恒例祭祀（中紀）に準じて行うという国家的行事になったのです。

この内容は、当然に平安時代の文学には「貴族の春の行事」として書かれています。最も有名なのが「源氏物語」の「葵の巻」にある、葵祭の斎王列の見物に出掛けた葵の上（光源氏の正妻）と六条の御息所（光源氏の元の愛人）が「車争い」でトラブルを起こし、負けた

六条の御息所の生霊が葵の上にとりつく、という話が思い出されます。

簡単にそのあらすじだけをここに書きますと

源氏が御禊の行列に加わることで、貴族から下々まで様々な人がその姿を一目見ようと、道を埋め尽くしています。かねてから源氏に冷たくされていた六条御息所も例に漏れずその一人。車(牛車というもの)で見物に来ていました。一方葵の上は身重(妊娠中)で気分が優れないため見物に行くつもりがなかったのですが、物好きな女房たちに急かされて渋々出かけます。葵の上の車は、すでにいた他の車や人を押しのけ押しのけ我が物顔で道を行きま

す。その時、いい場所にあってどかない一台の車がありました。それ(誰の車か)とわからないようにしていますが、葵の上方には、六条御息所のものだとわかりました。酒に寄っていた双方の従者たちが、そこを退けいや退かぬと喧嘩騒ぎを起し、葵の上も素知らぬ顔で止めようとしません。

結局、御息所の車は激しく壊され、はるか後ろに追いやられてしまったのです。

後に、この悔しい思いをした六条御息所は、生霊となって葵上に取りついてしまい、そして、葵上を取り殺してしまうということの切っ掛けとして描かれているのです。

このエピソードは源氏物語から独立して能「葵上」や舞踊、小説になっていますので、興味のある人はそれを見ていただいたらいかがでしょうか。

2 江戸では三社祭が初夏のお祭り

一方、東京では「浅草の三社祭」があります。

昔の祭りは3月17日、18日の両日に行われ、丑、卯、巳、未、酉、亥の1年おきに本祭が行われました。

正和元年(1312)から三社の神話に基づき船祭が始められたと云われています。

三社の神話とは「推古天皇三六年の三月十八日、宮戸川(隅田川)で三人の漁師が漁をしとみると、網に観音菩薩の像がかかった。三人の漁師は、もと都の人で、土師真仲知(登茂成)とその従者、^{ひのくま}桧隈浜成・竹成の兄弟だった。像は十人の草刈の童によってあかざ(藜)で屋根を葺いた堂に安置され「日の権現あかざ堂」と呼ばれ、のち浅草寺となった。本堂向かって右の三社権現(浅草神社)には、土師真仲知ら三人がまつられてゐる。」(浅草寺縁起より)という伝説によって浅草寺の祭りが行われるようになったのです。ちなみにこの神話は、雷門から浅草寺本堂に向かって歩いてゆくと、ちょうど仲見世商店街が途切れたところの右側に、絵巻物を切り取ったような感じでその内容が書かれているので、皆さんも見たことがあるのではないのでしょうか。

もともと、この伝説から出てきているので、隅田川での漁と船をお祭りする「船祭」と、純粹に観音様をお祭りする「観音祭」、そして浅草寺本尊を祀る「示現会」に分かれてお祭りをしていました。というのも、一つは船の神社であり、漁業の大漁を祈願するお祭り、一

つは、古代からすでに進んでいた「神仏習合」に従って、浅草の観音様を神と見立てて観音祭りを行ったのです。今では寺と神社は違うといいますが、昔はそのようなことを言うこともなく、おおらかにお祭りを楽しんでいたんですね。しかし、基本的には観音様のお祭りであることから、仏教的なお祭りが行われていたようです。そして浅草時の御本尊である観音菩薩を見つけた3人、土師真仲知（登茂成）とその従者、桧隈浜成・竹成の兄弟を祭った本尊示現会のお祭りです。これは、何しろ神様のお告げが3人のところに届き、そしてこの3人が観音様を見つけたということから、3人が神に近い人物として祀られるに至ったのです。

この3つのお祭りに関しては、当然にお祭りする相手もそして信者となる人々も違いました。そのために、浅草の町が3つに分かれてお祭りを別々に行っていたのです。しかし、時代が進むにつれて、この3つのお祭りを統合するようになったのです。そして浅草一帯のすべての町が総出でお祭りをする、そんなお祭りになったのです。

1872年から5月17・18日に行われるようになり、現在は5月第3週の金・土・日曜日に行われています。正式名称は「浅草神社例大祭」といいます。

現在は氏子である四十四町と朝倉組合が構成している浅草神社奉賛会によって執り行われています。

初日は東京都の無形文化財でもある「びんざさら舞」の奉納を始め、各種踊りやお囃子などの大行列が町内を練り歩きます。2日目は大事な「例大祭式典」が行われ、三社祭の見どころでもある神輿約100基が勇ましい担ぎ手と共に運ばれてゆきます。

3日目はいよいよ浅草神社の神輿3基の出番です。

一之宮には土師真仲知命、二ノ宮には桧隈浜成命、三之宮には桧隈竹成命の御神霊が移されています。こちらで祀られている三社権現は、観音像を発見した桧隈兄弟に、土地の文化人であり浅草寺の始まりを作り上げた土師真仲知を表しています。

三社祭は、特に江戸時代において、将軍の御膝元の祭りとして、江戸っ子の粋を表現するそんなお祭りになりました。

3 江戸時代の三社祭と浅草寺

江戸時代になり、幕府を開いた徳川家康は浅草寺を徳川家の祈願所に決めました。

徳川家の祈願所となったために、徳川家からは様々なものが寄進されます。当然に家康をはじめとする将軍も浅草寺に参内しています。3代将軍家光は、寛永14年（1637）に神輿を寄進し、また慶安2年（1649）には本堂を再建して、3神に加え家康公と大国主命の二柱も合祀したといわれています。当時も神仏習合で、浅草寺は寺と神社を合わせた形になっています。家康は当然に「東照大権現」として祀られることになります。日光や静岡に東照宮があるのに、江戸に東照宮がないというのは、増上寺には徳川の墓所、寛永寺、そして浅草寺と、将軍の御膝元だけに様々なところに東照大権現が祀られているからとされています。

このようにして將軍家の寄進があったことから、浅草寺の堂や塔も立派になり、徳川幕府の庇護の下で、浅草寺は当時の庶民が訪れる安息の地となりました。

また、浅草は、浅草寺、浅草神社詣と、芝居小屋などが立ち並ぶ娯楽の地として、江戸文化の隆盛に大いに寄与したことは言うまでもありません。もちろん、現在もその名残から、浅草寺境内には様々な芝居小屋や寄席があり、また、日本で最初の遊園地として「浅草花やしき」があるのも、このような江戸時代の娯楽の地としての名残が大きなものではないのでしょうか。

そのような場所のお祭りだけに、三社祭は非常に大きなお祭りとして多くの人に親しまれているのです。

江戸末期に編纂された絵入りの年中行事記「東都歳時記」に三社神輿船渡御の絵が描かれています。この絵は、当時の漁師たちがふんどし一つで、三社神輿を乗せた船で隅田川を渡御する様子を描いたものですが、祭りがたいそう賑わっていた様子がうかがい知れます。三社祭がもともとは「船祭」であったことを示す一つの内容として、漁師が総出で神輿を船に乗せて、隅田川を渡る様は、まさに、3人が観音様を見つけた時のことを示している一つの祭りの形態ですね。3人の本尊が、観音様のいらっしゃった川に向かうさまは、「東都歳時記」だけでなく様々なところに見られるもので、江戸時代の三社祭のクライマックスだったようですね。

この船渡御を今はもう見ることはできませんが、やはり浅草の主演は、今も昔も隅田川であるのかもしれませんが。なお、家光が寄進した神輿は、その後約300年もの間担ぎ抜かれたといわれています。

この將軍家光の寄進の神輿は、このほかに奉納されていた7体の神輿と一緒に戦災ですべて焼けてしまいました。現在存在する三社祭の御神輿は、昭和25～27年に氏子四十ヶ町により奉納された一之宮、二之宮、三之宮だけです。一之宮は土師真仲知命、二之宮は桧隈浜成命、三之宮は桧隈竹成命を祀っており、いずれも家光に因み日光東照宮の神輿を模して造られているそうです。これらの3基の本社神輿は、浅草神社の神輿庫にしまわれています。

さて、少々余談ではありますが、浅草寺境内にある弁天山の鐘樓の鐘は、元禄5年(1692)に徳川5代將軍綱吉の命により作られたものと先にご紹介しました。綱吉の家臣であった牧野成貞が、寄進した黄金200枚を地金の中に鑄込ませたといわれています。

当時この鐘は江戸市中に時刻を知らせたことから「時の鐘」ともいわれています。今でも大晦日には除夜の鐘が鳴り響き、また毎朝6時にも時を知らせる鐘の音が響きます。今も昔もこの鐘は江戸の「時」を刻む鐘になっています。また、その時を知らせる内容は、本堂に時を刻む御線香に火がつけられて、その燃え方で時を知るようになっています。昔は、時間を御線香の燃え方で計っていましたが、その時を告げる内容はお寺で行っていたのです。

この鐘についてちょうどこの時代に生きていた芭蕉も、次の句を残しています。

観音の いらか見やりつ 花の雲

花の雲 鐘は上野か 浅草か (芭蕉)

最初の句は、貞亨3年(1686)芭蕉43歳、2番目の句は貞亨4年(1687)44歳のときに、深川の草庵で作ったものといわれています。やはり芭蕉も毎日この時の鐘の音を聞いて暮らしていたのです。ちなみに、芭蕉が奥の細道の旅に立ったのは、元禄2年(1689)46歳のときですから、もうこの鐘の音を聞くことはできないだろうと思っていたかもしれません。なんだかそのような内容の話が出てきているんですね。

4 春祭りといえば「博多どんたく」

さて「春の祭り」ということで京都の「葵祭」と東京の「三社祭」をご紹介しました。

この時期にはほかにも日本全国で様々なお祭りが 있습니다。例えば歴史がしっかりとわかっていませんが5月の初めには「博多どんたく」なども有名です。毎年ゴールデンウィークの集客数で200万人を超える一大イベントです。

もともとは、博多松囃子を原型としたその大型のものという感じがあります。貝原益軒の『筑前国続風土記』には、治承3年に病没した平重盛に博多の人々が「袖の湊」造営の恩等に感謝を示すために行われたと書かれています。実際に、九州は平家頼朝の人が多く、壇ノ浦で滅びた平家が九州にわたっていれば、捲土重来していたのではないとも言われていますし、日宋貿易を行った平清盛の遺構があれば元寇で九州も平安が保たれたのではないかとされていたようです。逆に、源氏がきらわれていたということも言えるのかもしれませんが。このほかにもさまざまな起源が言われています。

博多の豪商神屋宗湛の『宗湛日記』によれば、文禄4年10月29日に筑前領主小早川秀秋の居城であった名島城へ博多の町人が松囃子を仕立て年賀の祝いを行ったと記されています。このような博多松囃子の行列が、ドンタクに徐々に発展していったのではないのでしょうか。

江戸時代の博多松囃子は福岡城へ福岡藩の藩主を表敬するため正月15日に赴く年賀行事として行われていたようです。平和の時代になって徐々にこれらの内容が発展しますし、また、福岡藩の藩主は、聡明な黒田官兵衛を祖とする黒田家の領地です。「黒田節」などでも有名な土地柄で、気性が荒いが人情味があることで有名な福岡の人々は、非常に派手好きで、またそれを楽しむようなお祭りになります。当然に博多松囃子もそのような勢いで発展します。

福祿寿・恵比須・大黒天の三福神と稚児が松囃子の本体です。これに博多の各町・各人が趣向を凝らした出で立ちや出し物で続きます。これを福岡では「通りもん」と呼びます。この三福神・稚児・通りもの構成が現在の街を練り歩きます、これが現在のどんたくの原型になります。こう考えると「博多どんたく」の原型は福岡藩になってからできたということなのかもしれません。福岡城を出たのち三福神と稚児は城下の武家町・福岡を通過して博多へ戻り、神社仏閣や年行司や年寄の宅を祝いながら練り歩きます。また通りもんは知人宅や商

家にて演芸を披露して祝います。まさに、福の神が来たというような感じでこれらの行列は受け止められます。ほかのお祭りと同じように、神々としてあらわれた通りもんに対して商家などは返礼に酒や肴を振舞ったのです。

5 なぜ春にお祭りが多いのか

さて、博多どんたくも含め、春には様々なお祭りがあります。これが6月になるとお祭りはほとんどなくなってしまいます。

なぜ「春」5月（旧暦の4月）にお祭りが多いのでしょうか。それは当然に田植のお祭りで、今年の豊作策を祝うものが非常に多いということになります。

「葵祭」は朝廷のお祭り、三社祭は町人というよりは「将軍様の御膝元」のお祭り、そして「博多どんたく」は、平家に感謝するということが庶民のお祭りになっています。いずれも、神々が「街」に降りてきて、街の間の中に混じり、町を練り歩くという構成になっています。この時期は、木々が芽吹き、そして桜も散った後で、神々が「今年の作付」や「漁」の様子を見に、そして町の人々の願いを聞くために人々の間に降りてくると信じられていたのです。

そのために、田植えの時期のお祭りは「今年の豊作を占う」という意味があるのと同時に「春の息吹を感じる活気あふれた」お祭りになります。昔から、この時期のことが様々に書かれているというのは、まさに、そのような息吹を感じることを、そして新しい年の始まり、というよりは新しい仕事の始まりを考える人が多いのです。

「田楽踊り」「田楽能」などが多いのもこの時期の特徴ですね。特に田植え祭りや田植えに関する内容を非常に多く行い、そして魚などもすべてこの時期に豊漁を祝うのです。

逆に、この時期はもう一つ「先祖祭り」が多いのも特徴です。日本は先祖霊を崇拝する内容が非常に多いのです。そのために、先祖の霊の力を借りるということになるのです。

「秋祭り」は「豊作を感謝する」お祭りであるのに対し、「春祭り」は、「今年を祈願する」お祭りであり、非常に活気のあるものが多くのが特徴ですね。ですから山車や神輿が練り歩いたり、あるいは流鏝馬など「占い」を行う神事があるということになります。葵祭でも神事の流鏝馬があり、また、今はなくなりましたが三社祭では船に神輿を乗せる神事があります。博多どんたくでは、福の神をお囃子で練り歩きながら、芸を披露するという風習があり、その笑いが起きるか起きないかで占いの要素があります。芸をする人は責任重大ですね。その緊張感が却って笑いを誘ったのかもしれませんが。

この内容は稲作から離れてしまった都会でも同じようなお祭りになっており、そこで「粋」を示すようなところになってくるのではないのでしょうか。

みなさんも「春」のお祭りで今年一年を占い、そして「秋」のお祭りで、一年を感謝する。そのような一年のサイクルを心がけてみると、今まで見えなかった「日本」が見えてくるのではないのでしょうか。